

<会員による自著紹介>

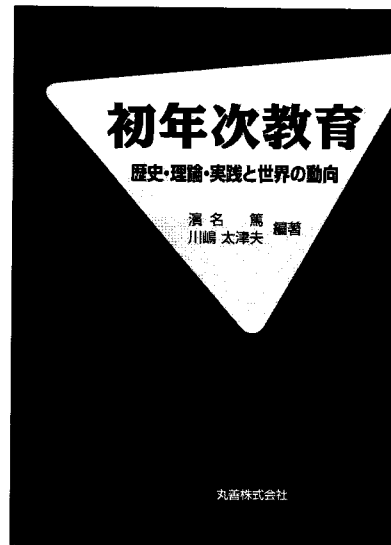
初年次教育—歴史・理論・実践と世界の動向—

濱名 篤・川嶋太津夫（編著）

関西国際大学・神戸大学

丸善株式会社（2006年発行）

定価 3,780円（税込）



本書は、日本の高等教育関係者に初年次教育とはどのような教育プログラムであるのかを、包括的に理解してもらうために書き下ろした、理論と実践の両立をめざしたものである。執筆にあたっては、1999年に大学教育学会の課題研究集会で「学生の自己教育力」をテーマとしたシンポジウム以来、大学教育学会の初年次教育研究委員会や科学研究費のプロジェクトを通じ研究を積み重ねてきた国内の初年次教育研究者、初年次教育の代表的実践校関係者、そして海外の初年次教育の指導的研究者たちに参加してもらうことができた。

内容は、4部構成を取っている。第1部は「歴史と現状」について、編者のひとり川嶋太津夫の「初年次教育の歴史と現状」から始まり、初年次教育のパイオニアであるJ.N.ガードナーとA.K.コッチの執筆によるアメリカでの初年次教育の歴史、R.L.スウィングによる世界的動向の紹介、山田礼子、杉谷祐美子による日本における初年次教育の概念整理と現状分析、そして井上義和による初年次教育における「第一世代問題」と、初年次教育がどのようなものか、これまでの研究成果を集積している。

第2部は、日本における初年次教育の実践事例を紹介している。国際基督教大、関西国際大、京都文教大、金沢工業大、大阪女学院大のそれぞれの特徴のある取り組みを紹介し、これから初年次教育を始めようとする大学等への参考に供している。

第3部は、海外における事例を紹介しており、米国のノースキャロライナ州のアパラチアン州立大、豪州のモナシュ大、スコットランドの大学全体の取り組みについて紹介している。

最後の第4部では、再び理論に戻り、スウィング執筆による初年次教育の評価についての論文と、もう一人の編者濱名が、日本における初年次教育の可能性と課題についてまとめている。

会員各位や大学関係者に、初年次教育についての全体像を知っていただく基本的文献として活用していただければと考えている。